



アマモの森の  
ご飯屋さん

---

桜あげは  
*Ageha Sakura*

RB

レジーナ文庫

## ディミトリ

第二王子。  
つうみんきん  
傲岸不遜な  
武人。

## 村長

アマモの森の近くの  
村の長。何かとミナイに  
親切してくれる。  
肉好き。

## ラース

赤い髪の精霊で  
能力は「力」。  
ディミトリと  
契約している。

## ミカエラ

冒険者の青年。  
空腹で倒れていたところを  
ミナイに助けられ、  
彼女に一目惚れした。

## ミナイ

「料理」の能力を持つ  
精霊の少女で、前世は孤独なまま  
若死にした日本人だった。  
契約してくれる人間が  
現れなかったためアマモの森に  
ひっそりと隠れ住もうと  
していたが――

## ジェラール

セインガルト国の第一王子。  
一見冷たそうだが  
精霊思いの優しい性格。

## シオン

紫色の髪と瞳を持つ精霊。  
「言語」の能力を使い  
ジェラールに  
仕えている。

登場人物紹介

## 目次

アマモの森のご飯屋さん

7

番外編

赤と紫

303

書き下ろし番外編

精霊と冒険者、冬の休日

333

アマモの森のご飯屋さん

## 一 精霊と人間

白い光の粒子を立ちのぼらせている暗い湖のほとりに腰かけ、私は美しく満ちた銀色の月をぼんやりと見上げた。

明日は、私たち——成人を迎える精霊がこの森を出る日だ。『精霊の森』で月を見るのは、これが最後になるだろう。

この森は『精霊の森』と呼ばれる、一般の人間が立ち入らない土地だ。美しい花々が咲き乱れ、ふわふわと淡い光を放つ綿毛が空を舞っている楽園のような場所。

私は、そんな緑溢れる素敵な住処すみかで十六年間仲間たちとのんびりした日々を過ごしていた。森で狩りをし、木の実や花の蜜を糧かてにするという原始的な生活だ。

けれど、精霊には、「自分たちが住む森——『精霊の森』があるセインガルト国に仕えなければならぬ」という義務があった。具体的には、セインガルトで働く騎士たちと主従契約を交わし、彼らをサポートするというものだ。

つまり森に住む精霊たちは、十六歳になると住処すみかを出て騎士と契約しなければならなかった。

そして、森を出た精霊のほとんどは、二度と戻ってこない。最後まで主人となった人間のもとで過ごすことが多いのだ。

例外的に森に戻ってきているのは、主人が死んだという者で、彼らが契約前の精霊たちに人間の暮らしについての基本を教えていた。

おかげで、若い精霊たちも文字の読み書きができ、人間の生活についてある程度知識を持つている。

なぜそんな義務ができたのか詳しいことは知らないが、私たち精霊の間に古くから伝えられているお伽話おとぎばなしによると、はるか昔にこの国の王に精霊の娘が恋をしたのが発端とのことだ。

その物語は『二人は契約を交わし、末長く幸せに暮らしましたとき。めでたし、めでたし』で終わっている。けれど、私はその話を疑っていた。

なぜなら、私にはこの世界とは別の世界で生きた過去の記憶が残っている。

私は、日本という国の貧しい母子家庭に生まれて、大人になる前に死んだ人間だ。なんの取り柄もない、地味で大人しく、周囲の人たちからいても同じような扱

いを受ける女の子。その記憶のせいか、私は人間というものに期待していない。契約のお伽噺とぎばなしみたいに幸せな理由でこんな義務が生まれたとは思えなかった。

しかし、最初に契約した精霊の娘は精霊たちの間で今もなお尊敬されていて、彼女の残した『人間と契約せよ』という遺言は律儀に守られ続けている。

きちんと人間の役に立ってこそ一人前の精霊——というのが、セインガルトの『精霊の森』に住む精霊に共通する価値観だ。それに一人だけ異議を唱えるわけにもいかず、私は参っていた。

前世の記憶はもうぼんやりとしてきてしまっているが、精霊となった私がいるこの世界は、前世風に言うと『ファンタジーの世界』と言われるような場所だ。文明はあまり発展していないし、地球にはいなかった生物がいる。その上、魔術や呪いの類くわいがある不思議な土地。

そして、精霊という生き物が存在している。私は、そんな精霊のうちの一人だ。元の世界にはいなかった生物だが、精霊は少し小柄なだけで姿形は元の世界の人間とほぼ同じ。寿命も同様という生き物である。

以前の自分と大きく異なる部分は、人間には現れない水色の髪と群青色の瞳、そして羽根だけ。精霊の髪の色と目の色はカラフルで、個体によって様々なのだ。私は青系の

配色だが、赤色や紫色の者もいる。

自分たちとは違う生き物を蔑さげすむ者が多くいる人間と、私たち精霊が契約してうまくやっていけるのだろうか。

そんなことを思い悩んでいるうちに夜が明けた。

今年十六歳を迎えた精霊は、全部で五人。全員で森の入り口に並び、城から迎えに来る騎士を待つ。

「ねえねえ、『水色の』楽しみね。今日は、人間との契約の日よ」

隣にいた紫色の髪の精霊が、親しげに私に話しかけてきた。『水色の』とは、私の呼び名だ。

精霊には名前をつける習慣がないので、だいたい見た目を反映した呼称で呼び合う。

私の場合は、髪の毛が水色なので『水色の』というわけだ。

話しかけてきた彼女は、紫色の長い髪を持つことから『紫の』と呼ばれている。

「そう、ですね……」

私は沈んだ声で返した。

誰にでも気さくな友人、『紫の』とは違い、私は他人と話すのが少し苦手だ。

長年一緒にいたこの精霊たちとは、普通に会話したり一緒に行動したりできるよう

になったものの、初対面の相手の前ではきつと緊張からほとんど何もできないと思う。これは、前世から引き継いでしまった性格だ。

転生して、そのうえ十六年も経つというのに、私の短所は根本的に改善されていない。そのことを考えるたびに、自分はなんて駄目なのだろうと自己嫌悪に陥る。

「ああ、人間が永遠に迎えにこななければいいのに……」

けれど、昼前には、三十人ほどの騎士の集団が森に到着してしまった。

「お前らが今回城へ来る精霊たちか。昨年は十人もいたというのに、今年はたったの五人とはな」

騎士たちの中から、黒髪赤眼のひととき屈強そうな人間の男が出てきて怒鳴った。

大きな声と、大きな体躯、大きな態度に世間知らずの精霊たちは例外なく怯む。

安全な森の中でふわふわと暮らしていた精霊は、こういった厳めしい者に慣れていない。人懐っこい『紫の』でさえ、彼に話しかけられずにいる。

「まあいい、さつさと馬車に乗れ。城へ向かう」

促されるまま乗せられた馬車の窓には、鉄格子が嵌っていた。逃亡防止の目的でつけられているように思える。

私は、嫌な予感に駆られた。

——広い部屋の中央に、十六歳になった男女の精霊たちが集められていた。

ここは、セインガルトの王城の一室だ。

薄暗いその部屋の壁と床は全て滑らかな黒い石できており、天井から吊るされている古びたシャンデリアだけが鈍い光を放っている。

緊張した面持ちの私たちを、騎士姿の屈強な人間たちが取り囲み、値踏みするようにジロジロと見つめてきた。

「今年こそは、使える力を持つ奴がいればいいのだが……」

そう呟いたのは、森で大きな声を上げていた男だ。

彼が口にした力とは、精霊の持つ加護のことを指している。

精霊は皆、なんらかの加護を一つ持って生まれてくるのだ。精霊と契約した人間は、その恩恵を受けて自らも加護の力を使えるようになる。

例えば、『力』の加護がある精霊は強い力を持っていて、戦場で騎士の役に立つことができるのだ。また、『知恵』の加護は、作戦を練る参謀や指揮官に重宝された。

加護の種類は、騎士たちに歓迎されるものから微妙なものまで様々だ。

私の持つ加護は微妙なもの筆頭だろう。

前世で周りの人間たちに無視され続けていた私は、今世でも誰にも必要とされないかもしれないと思うと暗い気持ちになった。

「俺はこの国の第二王子、デイミトリ・ガルデイオだ。第二王子直々にお前たちを迎えやっただから光栄に思え」

大柄な男——デイミトリは横柄な態度で精霊たちを見回し、話を続けた。

「右端のお前から、順に加護の種類を言え」

唐突に一人の精霊を指名し、居丈高に命令する。

運悪く端に立っていた精霊は、震えながらデイミトリに告げた。

「か、加護は、『跳躍』です……」

「ふん。戦場では、まあまあ使えそうだな。次！」

「僕に加護は、『遠見』です」

「なるほど、これも使えるな。次！」

次々に加護の種類を聞いていくデイミトリを見て、私は不安な気持ちが抑えられない。幸か不幸か、一番左側に立っているのです、私の答える順番は最後だ。

「俺に加護は、『力』だが？」

三番目に答えたのは、『赤いの』と呼ばれる、私と仲の良い精霊だった。赤い髪に

橙色の瞳を持つ彼は、第二王子の威圧的な態度に屈することなく堂々としている。

（すごいなあ。あんなに上から目線の人に、臆さず返事ができるなんて）

私は、『赤いの』に尊敬の念を抱き、事の成り行きを見守った。

「ほう、『力』の加護か！ それはよい！」

声を弾ませたデイミトリが、そのまま『赤いの』に話しかける。

「気に入った。お前とは俺が契約してやろう。次の精霊、加護を答えろ」

次は、『紫の』の番だった。彼女は、緊張を感じさせない凛とした声ではっきり答える。

「私の加護は、『言語』よ」

「なんだ、それは？ 微妙だな……内政担当に回すか」

デイミトリの言葉に、『紫の』はショックを受けた様子で視線を逸らした。自分の加護を微妙などと言われて、傷つかないはずがない。

（でも……）

私からすれば、『紫の』の『言語』という加護はまだ優れたものに思える。

次は私の番だが、できれば答えたくない。デイミトリの反応が怖いのだ。

「次！」

しかし、彼の声は容赦なくとんできた。



もはや、私には「答える」という選択肢しか残されていない。

「……か、加護は、『料理』、です」

消え入りそうな声を絞り出して答えた私は、俯きながら彼の反応を待った。

私の力『料理』は、文字通り料理に関する知識や技術が向上する加護である。

食べられる物と食べられない物を見分け、なんとなく美味しい味付けが思い浮かび、料理を作る手際がよくなるというもの。

この力もきつと前世から受け継いだものだ。

前世の唯一の家族である母は昼と夜のパートを掛け持ちしていて忙しく、私は小さな頃から食事を作っていた。

最初は義務だったそれが、いつしか唯一の楽しみになった。美味しい食べ物は、辛い気持ちを手つ取り早く慰め、私を幸せな気持ちにしてくれたからだ。

バイトをしながら通っていた高校に居場所がなくても、仕事で疲れて帰ってきた母に理不尽な理由で叱られても、美味しい食べ物だけは私を裏切らない。

だから、私は今世でこの能力を授かったことに恨みはない。

けれど、戦いに重きを置く騎士には全く必要のない力だ。

「……………」

デIMITリは、何も答えなかった。彼の雰囲気から、私に何も期待していないことが感じられる。

「『跳躍』と『遠見』と『力』の加護を持つ精霊は、俺たちについてこい。『言語』の精霊は、内政担当者を回すから、そこで待機している。以上だ」

そう締めくくると、彼は部下の騎士たちと一緒に三人の精霊を連れて去っていった。

(まさかの無視だった！)

私の存在は、デIMITリにとって認識すらしてもらえないものらしい。

こいとも残れとも言われなのまま、私は広い部屋の真ん中に立ち尽くした。

「大丈夫よ、元気を出して」

隣で慰めてくれる『紫の』に、私は「平気だよ」と笑い返す。

だが、ある程度予想していたとはいえ、存在を無視されたことがショックで何も考えられなかった。

(……駄目だ。今世なら心穏やかに生きていけると思ったけれど。生まれ変わっても、私はこんな立ち位置なんだ)

どこにいても、私は誰にも必要としてもらえないし、どうすれば受け入れてもらえるのかもわからない。転生してもそこから抜け出せない自分が、とても惨めで情けなかった。

しばらくの間、私たちは部屋の中でじっとしていた。『紫の』は、それぞれと落ち着きがないが、私は諦めの境地に達している。

不意に、キイと小さな音を立てて部屋扉が開かれた。

静かな足取りで中に入ってきたのは、黒髪赤眼に眼鏡をかけた神経質そうな男だ。彼の外見は、どことなく先ほどの大男——デイミトリと似ていた。

「ふむ、君たちが今年の精霊だな？　ここに残されているということは、騎士向きの加護ではないのか……」

男は、私と『紫の』を交互に眺めて言った。

「私の名は、ジェラルル・ガルディオ。この国の王太子だ。そんなに不安そうな顔をすることはない。騎士と契約できなくても、内政担当者や貴族と契約できるからな。今は隣国との関係が安定しないので、騎士が優先されているだけだ」

デイミトリと似ていると思ったのは、間違いではなかったらしい。彼らは、兄弟だったけれど、性格は違うみたいだ。ジェラルルは、私たちを安心させるように話しかけてくる。「ところで、二人の加護はなんだ？　デイミトリが、さっさと契約の儀式をしに行ってしまったので、詳細を聞けなかったのだが……」

「私の加護は、『言語』よ……どんな国や種族のもとへ行っても、言葉を交わすことができるし、太古の文なども読み解くことができる力なの」

そう答えた『紫の』は、先ほどよりも必死に自らの能力を売り込んでいる。自分の能力に自信がなくなっているのだろうか。だが、そんな彼女よりも問題なのは私だ……

「……加護は、『料理』です」

そう答えつつ、目の前のジェラルルを観察すると、案の定困っていた。

（それは、そうだろうか）

精霊の力で周囲の国を牽制しているものの、この国の軍事力に余裕があるわけではないのだ。戦場で呑気に料理なんか作っていられるかというのが彼らの本音に違いない。

かといって、内政担当や貴族に『料理』の加護が受け入れられるかといえば、そうでもなかった。

内政に追われているこの国の役人に料理を作る暇などないし、食べ物にこだわるお国柄でもない。それに貴族は料理をしないので、私の加護は無用の長物だ。

（となると、お城の料理人と契約するのか）

私の考えを読んだかのように、ジェラルルが喋り出す。

「城の料理人たちに回すか。いや、しかし……今までは上位の騎士や、それ以外なら最低でも大臣以上の内政担当者が契約していたからな。身分の低い者との契約は前例がな

い……とりあえず」

顔を上げた彼は、『紫の』を見つめて言った。

「加護が『言語』の君は、私と共に来るように。そして、もう一人は……しばらく城内で待機だ。私が責任を持って、契約相手を見つけてくる」

そう言うと、ジェラルルは私を城の中にある客室へ案内し、『紫の』を連れてどこかへ行ってしまふ。

豪華な客室にポツンと取り残された私は、部屋の窓から外を眺め嘆息した。

精霊は、セインガルトという国の王都の東に位置する森の湖でだけ生まれる。昔は別の場所でも生まれたらしいが、最近ではセインガルト国でしか見ないらしい。元の世界風に表現すると、絶滅危惧種なのだろう。

そんな精霊に転生した私は、前世の記憶と加護を頼りに食材を火で炙り、少しの調味料を加えて料理を楽しんでいた。

食材に手を加えることを知らなかった他の精霊たちも、私の料理を受け入れている。

契約前の精霊は、普段森の外に出ることがない。出ようと思えば出られるのだが、彼らは皆人間に興味を持ちつつも「成人するまで森の外に出てはいけない」という精霊の

ルールを守っているのだ。

だから彼らは、森の中で唯一料理をする私の存在をとでも喜んでくれていた。けれど、人間——特にこの国の騎士には私の力は必要ないだろう。

ふと外を眺めれば、そこは『精霊の森』とも日本の景色とも違う、馴染みのない人間の世界だ。まだ昼間だからか、城の敷地内にある石造りの道を馬や人が忙しなく行き交っている。

窓から離れた私は、森から持ってきた荷物を床の上に広げた。何かの役に立つかもしれないと、できる限り多くの道具を持ってきていたのだ。

精霊の狩猟道具である弓と狩った獲物をさばくためのナイフ、それに炎石という前世の火打ち石のようなもの。趣味で持ち歩いている岩塩や前世の胡椒に似た小さな木の実と、その他諸々のスパイスやハーブ、もしもの時の手作り携帯食もある。あとは、森付近で拾った人間の使うお金が少し。

(今すぐ役に立ちそうなものは、一つもない)

しばらくすると、城で働く使用人が無言で食事を部屋に置いていった。

日持ちしそうな固いパンと具の少ないスープだ。あまり美味しくなかったので、私は持ってきた調味料でそれらに勝手に味をつける。

この世界の食事情は、日本と異なっていた。

パンが主食で品数が少なく、味付けは塩メインというか塩のみだと、人間と共に過ごしたことのある老精霊——『オジジ』から聞いていた。どうやら、彼の言っていたことは本当で、この人間には塩以外の調味料を使うという風習はないらしい。

また、前世と完全に同じ食べ物、今のところ塩以外見当たらない。

パンは主にコムの実という小麦に似た植物や、イズの実という大豆に似た植物から作られ、ライスはマイの実という植物を使っていた。

もっともこれらの材料は元の世界の小麦や米とほとんど変わらない。

——いつの間にか夜になり、使用人が夕食を持ってくる。

これもライスの味が薄く美味しくなかったもので、自分で味付けした。前世の赤じそに似た葉と梅に似た実を乾燥したものを混ぜ込み、さっぱりとした後味のおにぎりを五つ仕上げる。

うち二つを食べ、残りは大きな葉に包み、とっておくことにした。今の季節なら常温でも腐ることはない。今、この国は秋だが、こちらの世界は日本よりも涼しいのである。なぜ、おにぎりを三つ残しておいたかという、私には、とある考えがあったからだ。(ここを出て、どこか違う場所で、一人ひっそりと生きていきたい)

そのため、翌日分の食料を用意した。

たとえ偉大な祖先の遺言だとしても、それによって全く得をしない余り者が出るという事態が発生している。

きつと私の契約者はずぐには見つからないだろう。

(このままでは、本当にただのお荷物になってしまう……)

あのジェラルという王太子は、契約相手を探してくれると言っていたが、とても難しそうな顔をしていた。実際、私の契約相手を見つければ、厳しいと思う。だから……(私は、誰も加護できなくていい……前世に引き続き、他人に厄介がられるのは応えるから、やっぱり城を出ていこう)

これは、私にしては思い切った決断だった。

今まで私は、自分から動いて環境を変えようなんて一切してこなかったのだ。現状に不満を覚えつつも、何もしなかった。前世では子供だったという理由があるが……

我慢し続け、成人前にあっさりと交通事故で死んでしまったのだ。何一つ、人生に満足しないまま。

だから、今世は同じ轍を踏まないようにしたい。この選択が正しいのかどうかはわからないが、後悔だけはしたくなかった。

積もり積もった鬱屈うっくつした思いが、ついに爆発したのかもしれない。夜、城の住人が寝静まった頃、私は荷物を持ち、窓から夜空に向かってジャンプした。精霊には羽根があり、空を飛ぶことができる。さらに、この羽根は自由に収納できるので、普段は目立たない。

幸い、巡回している夜勤の騎士が星空を見上げることはなかった。

こうして私は、たった一人で城を抜け出したのである。

世間知らずの精霊であっても、私には前世の記憶が備わっていた。人に混じって生活していくことは、おそらく困難じゃない。

水色の髪が変といえは変だが、精霊に関わりのない人間からすれば「変わった髪色の人」くらいの認識で済むだろう。

案内簡単に城から脱出できてしまい拍子抜けだが、自由になれたのは嬉しい。

私は煌めく星海の中を羽ばたき、王都の外にある大きな森に降り立った。『精霊の森』に比べると暗くて鬱蒼うっそうとした場所だが、ここでなら静かに暮らせそうだ。

人間との契約を放り出した掟破りの私が、元いた『精霊の森』に帰ることはできない。この森で一人生きていこう。それに当たり、まず必要なのが「衣・食・住」の確保だ。

精霊の食べ物人間と同じ。

それに私は精霊の中でも狩りが上手だ。料理もできるので「食」については問題ないと思われる。

高い木の幹に腰かけて、少し欠けた青白い月を見上げる。一筋の流れ星を見送った私は、これから訪れる未来に胸を高鳴らせ、ゆっくりと目を閉じたのだった。

## 二 アマモの森

明け方、ガサガサと何かが茂みを掻き分ける音で、私は目を覚ました。獣の——それも、『精霊の森』では遭遇したことのないような大きな獣の気配がする。それに混ざって、わずかにだが人間の気配もした。

精霊は人間より感覚が鋭いので、いろいろな気配を察知できるのだ。

(なんだろう？ 行つてみよう)

誰かが襲われているのではと気になった私は、獣の気配のする森の入り口へ飛んだ。

人間は好きではないが、見捨てて死なれたとなれば後味が悪い。

森は、朝だというのに光が差し込まず、雨が降ったあとなのか地面がしっとりと濡れている。

しばらく進むと、私の目に衝撃的な光景が飛び込んできた。

小柄な曙色の髪あけぼのいろの男性が、ぬかるんだ土の上に俯うつぶせに倒れている。彼の隣には熊のような大きな獣が大の字になっていた。

(一体どういう状態なんだ、これ……?)

戸惑とまどって固まっていると、男性が小さな声を上げた。

「すみません……何か、食べ物……」

「えっ?」

声がよく聞こえるように、私は男性の傍そばへ降り立った。地面に顔を向けている彼に私の姿は見えていないはずだが、気配は感じ取れたようだ。

「どなたかわかりませんが、僕に……食べ物、恵んでくださいませんか?」

どうやら、彼は腹を空かせているらしい。獣のほうを見ると、腹の部分に大きな切り傷があった。こちらは、すでに絶命している。食べ物をあげるのはいいが、今私が持っているのは、城から持ってきた自作のおにぎりだけだ。

「あの、少ししかありませんけど……おにぎりであれば、どうぞ」

そう言って、荷物袋から三個の梅じそ味おにぎりを出し、彼の顔の近くに持っていく。それに反応して、男性がこちらを向いた。

見えるようになった彼の顔は、かなり整っている。思っていたよりとじわか齟齬そごい青年だ。その口元へ、私はそっと梅じそ味おにぎりを差し出した。

「……ありがとう」



「飲み水はないのですが、食べ物だけで大丈夫ですか？」

「大丈夫、鞆の中に水筒があるから……」

弱々しく口を開けた青年は、おにぎりを一口齧<sup>か</sup>る。そして……金色の目を見開くと、二口三口と猛烈な勢いで食べ始めた。すぐに彼の手が動き、私の持っている二個目のおにぎりを掴む。

「……美味しい」

彼は、恐るべきスピードで三個のおにぎりを完食した。

「……ごちそうさま」

「ごそごそと起き上がり、鞆の中から水を取り出す青年。その姿は先ほどとはうって変わって元気だ。その笑顔に心が優しくなる。

ただ単に空腹だっただけで怪我はなさそうなので、私はほっと息を吐いた。

「あ、あの、では、私はこれで……失礼します」

「待って！ 何か、お礼を……！」

青年はそう言うが、特にお礼をもらいたいとは思っていない。自分の作ったものを食べて嬉しそうしてくれただけで充分だ。それに見たところ、彼の荷物は少ししかなさそうだった。そんな人間から物を奪うほど私は強欲ではない。

(どうしようかな……あ、そうだ。いいことを思いついた)  
彼にあげてしまったせいで、私の朝ご飯が消えてしまった。何か代わりになる食べ物が欲しい。

「あの、それなら、この倒れている獣の肉をちよつとだけいただけませんか？」

「えっ!? 別にいいけど……これ、まさか食べるの!?」

「食べられると思いますよ」

森で暮らす精霊は、食べ物に対する勘が働く。特に、『料理』の加護を持つ私は、食べられる獣や木の実、キノコなどを瞬時に見極めることができる。

その力が私に告げていた、この獣は美味しい……と!

「だったら、もちろんいいけど……」

青年は恐る恐るというふううなずに頷く。

私は荷物袋からナイフを取り出し、さっそく獣の血抜きを始めた。

まずは、顔から足の付け根までをまっすぐに切り開く。続いて、手足も同様に切り開き全体の皮を剥いだ。胴体部分から内臓を取り出したあと、一番美味しそうな背中部分の肉を切り取る。

欲張っても一人で持ち運べない上に腐らせるだけなので、三食分にとどめておいた。

(一食分は今から調理して、残りは干して保存食にしよう。そのためには、夜露よつゆをしのげて肉を干せる場所が必要だけれど)

住む場所は、まだ決めていない。精霊に家は必要ないが、雨風が当たらない場所からは欲しいところだ。

ちなみに、以前の森では巨大樹のウロの中で暮らしていた。

その巨大樹の中は八畳くらいの広さがあり、雨漏りもなく快適だったのだ。足元には、獣の皮で作ったラグを敷き、家具類は森で集めた植物をそのまま使ったり、工作系の加護のある精霊に作ってもらったりしていた。

前世での人間生活の記憶がある私は、毎日野宿という環境に抵抗がある。

(家を探さなきゃな……でも、まずは朝ご飯を食べたい)

肉を手にし、その場を離れようとした私に、青年が焦ったような声を上げた。

「ちよつと、どこへ行くの!? 森の奥は危ないよ! この凶暴な獣は僕が退治したけれど、まだ似たようなのがいるかもしれない」

「平気です。森は慣れているし、大型の獣の気配はしません。万が一獣が出て、狩れ

ばいいだけでしょう?」

「……な、何を言っているの? 正気!」



優しそうな青年は必死で私を止めようとするが、面倒事を避けたい私は、彼の手をすり抜けて全速力で森の奥へ逃げた。

(危険な獣の気配はないし、あの人をあそこに置いていっても大丈夫だよな?)

彼が倒れていた場所は森の入り口に近いです、ゆっくり歩いても半日とかからずに外へ出られるだろう。ちなみに、私が走っている場所も、まだ森の端のほうだった。

(このまま直進すれば森の反対側に出られるのかな)

今、森の深部へ進む気はない。木の少ない場所で火を熾し、肉を焼いて食べるつもりだからだ。

しばらく走ると、川が流れている場所に出た。河原には丸く白い石がごろごろ転がっている。そこに森で採ってきた枯れ木を並べ、荷物の中から炎石を出した私はカチカチと火をつけた。

(森が湿っているせいかな、なかなかつかない)

着火に苦戦した私は、『精霊の森』にいる『オジジ』のことを思い出し出していた。

契約した騎士の死亡により自由になったその老精霊の加護は『火つけ』なのだ。彼はどんな場所でも道具を使わず簡単に火をつけることができた。私は、よく彼に火熾しを手伝ってもらったものだ。

しばらく奮闘した末、ようやく枯れ木全体に火が燃え広がる。燃えにくそうな木の枝にナイフで切った肉を刺した私は、直火でそれを炙り、持っていた塩とスパイスで味付けをしていった。胡椒に似た木の実が大活躍だ。

肉の焼けるとてもよい匂いが、森中に広がった。ジュウジュウと音を立てて、脂身から透明な汁がこぼれ落ちていく。

近くに生えていた見慣れないキノコが食べられそうだったので、川の水で洗って根元部分を切り落とし、そのまま火にかけた。

そして、バターに似た味を出す木の実を割ってふりかける。この世界は、調理しがいのある不思議な食べ物に溢れていた。

(何より、森なら簡単に食べ物が入るところが素敵だよ)

出来上がった料理から、白い湯気が上がっている。

木の枝に刺した肉に齧りついた私は、思わず笑顔になった。焼き加減が絶妙なミディアムの肉は噛むたびにジュウシーな汁を出す。

(美味しい。獣独特の臭みがなくて、高級和牛のような味だ)

キノコも香ばしくてバター風味が非常に合う。

そんなふうに一人で食事を楽しんでいると、近くで人の足音が聞こえた。

少しおぼつかない足取りなので、先ほどの男性とは別の人間だろう。その者はだんだん近づいてくる。

「誰……?」

少し迷ったが、私は食事を続けた。もし危ない人間であれば、空を飛んで逃げればいい。あれだけ頼りない歩行者ならばたやすく逃げられる。

しばらくすると、川下にその人間が現れた。

「いい匂いがあるのう」

白く長い髭を生やした老人だ。彼は、そわそわと落ち着きなく私を見つめ、白い眉毛で隠れている目で強く何かを訴えてきた。

「本当に、いい匂いだのう……うまそうな肉の匂いだのう」

もしかすると、先ほど助けた青年のように、この老人も腹を空かせているのかもしれない。この国には、空腹な人間が多いようだ。

「あの、よかつたら食べますか?」

幸い肉は多めにもらったし、キノコは周囲にたくさん生えているから、あげても問題ない。ためらいながらも提案すると、老人は満面の笑みを浮かべた。

それを受けて、私はまだ燃えている焚き火で再び肉とキノコを焼く。

「いやあ、葉草を採りに森に入ったら、よい匂いがしてきてのう……思わず引き寄せられてしまった」

焼き上がった肉とキノコを口にした老人は、上機嫌で喋り出した。

「それにしても、うまいのう! 今まで生きてきてこんな食べ物に食べたことがない!」

彼は年齢を感じさせない見事な食べっぷりで、あっという間に肉とキノコを完食する。(歳をとった人って、脂の乗った肉は苦手と思っただけだ……そうでもないのかな?)

前世の世界とこの世界とでは、人間の内臓のつくりが違うのかもしれない。

オリジナルで味付けをした肉とキノコを老人が美味しそうに食べたことで、私は少し嬉しくなった。自分という存在が彼に受け入れられたと思えたのだ。

キノコを食べ終えた老人は、上機嫌で話を続ける。

「わしは、この近くにあるホワイ村の村長をしておつてのう。このアマモの森にはよく来るのじゃが……森に生えているキノコが、こんなにもうまくなるとは知らなかったわい」

「この森はアマモの森というんですね。それにしても、近くに、村があるのでですか?」  
「ああ、この川を下った先じゃ。それほど遠くない……ところでお前さんは、どうして

こんな森の中にいるのじゃ？ 女の子が一人で危険じゃぞ、最近では凶暴な獣が出ているから、街の冒険者に討伐依頼を出しておる」

「冒険者？」

「そうじゃ。人々を困らせる獐猛な害獣を退治したり、普通の人間がたどり着けない場所にある珍しいアイテムを取りに行ったり……そういう仕事をしている者の総称じゃよ」

「ふうん、そうなのですね。ところで、あなたは、この森に詳しいのですか？」

「ああ。なんせ、この森と共に八十年近く生きてきたからのう」

そう答える彼は、誇らしげだ。きっと、この森について相当の知識を持っているのだろう。

森に詳しい人間に出会えたことは、都合がよかった。

「あの……でしたら、この近くにウロのある大きな木や、人が入れそうな洞窟はありますか？」

そう聞くと、老人は顔を上げてまじまじと私を見つめる。

「——今気がついたが……お前さん、人間じゃないな？ 精霊か……？」

彼の言葉に、私はハツとした。

（迂闊だった！）

明らかに、今の私の発言は問題だ。

普通の人間は、木のウロや洞窟に住まないもので、そんなものに興味が無い。長い間精霊として暮らしてきたせいで、その辺りの感覚が麻痺してしまっていた。

精霊とわかったからといって迫害されることはないと思うが、私は城から脱走中の身——

（本当に私って馬鹿すぎる！ でも、どうしてこの人は、今の発言だけで私が精霊だと言い当てたの？）

人々は精霊の存在を知ってはいるものの、森の中にいるか、騎士や国の上層部の人間としか行動しないと思っっている。それほど一般庶民の目に触れることは少ないのだ。

逃げようと踵を返す私に、老人が慌てて声をかける。

「待ちなさい。巨大な木や洞窟はないが、森の入り口付近に使っていない狩猟小屋がある。そこなら、自由にしてくれて構わんよ」

「えっ？」

「警戒しなくても大丈夫じゃ。わしの村の周囲で、お前さんに危害を加える者はいない。どうやら行くところがなくて困っているように見えるが、村に来てもらってもよいのじゃぞ？」

ありがたい提案だが、彼を信じきることはできない。人間の中には、平気で嘘をつく強欲な者がある。前世の私は多少なりとも、その被害に遭ってきた。

「お気持ちはありませんが、私は……」

「なに、気にしなくてもいいぞ。その代わり——」

老人が私の話を遮った。一体何を要求されるのだろうと不安に思った私は、ビクビクしながら体を硬くする。

しかし、続く彼の言葉は意外なものだった。

「またうまいものを見つけたら、ご馳走してほしい。お前さんの料理した肉とキノコは、本当に美味しかった……狩猟小屋は、わしを幸せな気分にくれた礼じゃ。それに、あの小屋は持ち主が亡くなって朽ちていくばかりでな。誰かが住んで、建物を維持してくれたらありがたい」

「でも……」

「もし気に入らなかつたら、いつでも出ていってくれ。まあ、無理強いはせんよ……精霊に強制なんてできないがな」

彼の言う通り、契約していない精霊を無理に人間に従わせるのは難しいだろう。何かあれば、飛んで逃げられる上に、たいていの精霊は人間よりも力が強い。たとえ、私の

ような弱い女でも一対一であれば負けることはないはずだ。

「見るだけ小屋を見てみたらどうじゃ？」

老人の言葉に、私は迷いながら頷いた。

「わかりました……よろしく願います」

住むところは欲しいし、彼の言うように気に入らなければ出ていけばいいだけだ。それに自分の料理で幸せになった礼だという言葉が嬉しい。

私は、老人に狩猟小屋へ案内してもらうことにした。

案内された木造の狩猟小屋は、やや古く散らかっているものの、壁に穴は開いておらず雨漏りもしていない優良物件だった。掃除をすれば、充分住めそうだ。

私はしばらく様子を見ながらここで暮らすことにした。

老人は、「ホワイ村に住んでもいい」と提案してくれたが、人に混じって生活するのはまだ抵抗がある。

私がつっぱり断ると老人——村長は残念そうにはあるが、納得してくれた。

「さて、まずは綺麗にしなきゃ」

私は小屋の掃除にとりかかる。

幸い古い掃除用具一式が小屋の隅に転がっていたし、世話焼きの村長が数種類の調味料と引き換えに、使わない家具や布製品を持ってきてくれた。

木製のベッドに赤いチェック柄の寝具、少しヒビの入った一枚板のテーブルに椅子二つ。これらと手持ちの調味料が交換なんて、条件が良すぎる。村長はとても親切なのだろう。

（これは、きちんとお礼をしなければならぬな）

とはいえ、私にできるのは料理ぐらいだ。彼は、それでいいと言っていたけれど、それだけでは私の気が済まない。

（でも、お金はほとんど持っていないんだよね……精霊にそんなものは必要なかったし）  
精霊の生活は、自給自足と精霊同士の助け合いに終始する。精霊の持つ加護は本来、自分たちの自給自足生活の上で必要なものなのだ。

しかし、ここで生活するにもお金が必要だった。私一人の力には限界がある。

（なんとか稼ぐ手段を考えなければ……でも、何をすればいいの？）

ふと、私が味付けした食べ物美味しうと言ってくれた青年と村長の顔を思い出す。

彼らに料理を褒めてもらって、私は嬉しかった。それに、以前いた森でも、精霊仲間たちと美味しいご飯を食べることが私の楽しみだった。

料理を食べた相手が喜んでくれると、私は自分がその場においても許されるような、受け入れてもらえたような——価値のある存在になれた気がするのだ。

「よし、決めた！」

私は加護を活かして料理を作って売ることにした。

幸い、この世界は日本ほど食品の販売に厳しくない。

（さて、材料はどうしようか？）

自作の調味料はまだ残っているので問題ないが、食材は肉とキノコの残りのみだ。

とりあえず、あるもので作ってみて、足りなくなれば、この森で調達すればいい。少し歩いただけで肉とキノコが手に入ったのだから、きっと他の食材もたくさんあるはずだ。

（料理を売ったお金が多ければ、村長にお礼ができるし、新しい食材や調理道具を買うことができるかもしれない。とにかく、一人で生きていくために頑張ろう）

精霊の森にいた頃は仲間と助け合って生活していたが、今の私は一人きり。何かあった時のためにも、蓄えは必要なのだ。

翌日、私は食べ物をお金を稼ぐという計画を実行することにした。

さっそく干してある肉の残りをナイフで薄く切り取り、数種類の調味料をまぶす。

この調味料の多くは、木の実を細かく砕いたものだ。醤油や味噌はないが、木の実同士をブレンドしたり発酵させたりして似たようなものが作れる。私は、それをさらに出汁と混ぜて新しい味を作り出したりもしていた。

配合などは大体その時のインスピレーションで決めるのだが、『料理』の加護が効いているせいか失敗したことがない。

味噌の味に近い木の実で甘辛く味付けした肉を風通しのいい場所に置き、干す。甘味を出すのには、狩猟小屋の近くにあった蜂の巣から採ってきたハチミツを使った。

一晚乾燥させておくと、いい感じにおつまみ風の干し肉が完成する。

「うん、まあまあ美味しい……」

私は大きめの葉っぱにそれらを包んで、籠に入れる。

（城から逃げて空を飛んでいた時に町の上を通ったな。今日はあの町へ出かけてみよう。ホワイ村だと住人が限られている上に、閉鎖的かもしれないし）

私は完成したおつまみを持ち、空を飛んで町へ向かった。

森を通り抜けて町の手前で着地し、そこからは徒歩で進む。いきなり空から人が飛んできたなら、精霊に慣れていない人間は驚いてしまっただろう。

（なるべく、騒ぎは起こしたくないものね）

町の中央は市場になっていて、人々が様々なものを売り買いしていた。

それぞれにテリトリーがあるらしく、主だった場所は大きな屋台や裕福そうな商人の店が占拠している。

私は市場の隅っこに陣取り、籠に入れたおつまみを売ることにした。この籠は狩猟小屋の中にあつたもので自作している。

「あの……お料理いかがですか？ 美味しいお肉のおつまみです」

料理は得意でも接客は苦手だ。そもそも、私は他人と話すのが好きではない。

よく知っている精霊相手なら普通に話ができるが、見知らぬ人間の前で声を上げるのは緊張する。

「おつまみ、いかがですかー？」

それでも、生活がかかっているので勇気を振り絞って通行人に声をかけた。しかし——  
売れ行きは、さっぱりだ。

（……ぜんぜん売れない）

私には商売に関しての知識がなかった。

（他にも、食品を出している人は、たくさんいるなあ）

中には、炭や鉄板を用意して、焼きたて熱々の食べ物を提供している人もいる。そん

な相手に即席おつまみが敵<sup>かな</sup>うわけがない。

「……これは、厳しいかも」

考えが甘かったようだ。私は籠<sup>かご</sup>の中にある大量のおつまみを見て、ため息をついた。人にただ声をかけているだけでは、誰も振り向いてくれない。時間だけが過ぎていき、だんだん私の声は萎<sup>しぼ</sup>んでくる。

「やっぱり、無謀だった？ 精霊が人間と契約せず、一人で生活していくなんて……」

——いや、精霊は関係ない。これは私自身の問題だ。

気を取り直し、もう一度声を上げようとした時、誰かが私の肩を叩いた。

「こんにちは、こんなところで何をやっているの？」

振り向くと、見たことのある顔の男が立っている。

「あなたは……あの時の？」

曙<sup>あけぼの</sup>色の髪に金の瞳を持つ彼は、森で行き倒れていたあの青年だった。明るい光の中になると、やはり美しい顔の持ち主だとわかる。

「僕は、ミカエラ。冒険者しながら各地を渡り歩いている」

冒険者とは、各地の害獣を退治する職業だ。村長が、昨日説明してくれたので知っている。

「だから、森であの獣を退治していたのですね」

「そうだよ。あの時は助かった、本当にありがとう——また会えてよかった」

ミカエラは、感極まった様子で頬を朱色に染めつつ、私の手を握った。

あまり人に触られたことがない私は照れてしまう。

「い、いいえ。でも、どうしてあなたは倒れていたのですか？」

「獣を深追いしすぎて、三日三晩何も口にしていなかったんだ。結局、あの獣は倒せたけれど、僕のほうも空腹で力尽きてしまった。そこに、美味しい食べ物を持った君が現れたんだよ」

私は手を握られたまま、彼の顔を見上げた。

何も食わずに害獣を追い続けるなんて、立派である。外見は私と同じ齡<sup>とし</sup>くらいなのに。

「ねえ、君はここで何をしているの？」

「ええと、今は手作りのおつまみを売っています」

「昼間から？ まあ、今の時間に酒を飲んでいる奴もいるけど。……僕にも一つちょうだい、いくら？」

「二百ペリンです」

この国のお金の単位については、『オジジ』が教えてくれていた。一ペリンは一円く

らしいの価値らしい。つまりこのおつまみは二百円。  
ミカエラは私に二百ペリンを渡すと、その場で包みを広げ器用におつまみを食べ始めた。

〔持ち帰り用だったんだけどな……〕

とはいえ食べ方は人それぞれなので、私はあえて何も言わないことにした。  
彼はすぐに食べ終わり、にっこり笑う。

「美味しいね。残りも全部もらえるかな?」

「ええっ!」

「心配しなくても、この間の獣退治で報酬をたくさんもらったんだ。買い占めても、そんなに大きな出費にはならない」

二百ペリンのおつまみ三十個分で六千円。

〔なかなかの出費になると思うんだけど……もしや、お金持ち?〕

戸惑う私をよそに、彼は躊躇なく全てのおつまみを買ってその場で食べる。

「んー! 甘辛い味が美味しいね、前にもらった食べ物も美味しかったけれど! こんなに美味しいおつまみは初めてだ、一体何でできているの?」

「……えっと、あなたにもらった肉の残りです」

「嘘っ……あの獣!? 大イガルゴの肉だったの!」

あの熊のような生き物は、大イガルゴという名前らしい。

「美味しいですよね。私、あんなにジューシーな霜降りのお肉は久しぶりでした。あの森にまた現れてくれるといいのですが……」

「いや、あの辺りには一体しかないよ。あんなのが何匹もいたら大変だ。討伐対象の獐猛な獣だからね。ところで、君はどこに住んでいるの?」

「ホワイ村の近くです。あなたに出会った森にある狩猟小屋に」

「アマモの森か……なんでまた、そんな場所に?」

ミカエラは、私を憐れみの混じった目で見た。何か、訳ありの人間だと感じたのだろう。実際訳ありなのだが、憐れまれるほど深刻なものではない。ただ、厄介者として扱われるのに耐えられず、勝手に脱走してきてしまっただけだ。

「そうだ、このあとホワイ村に寄る予定があるんだけど一緒に戻る? 町から村までは

距離があるから、女の子一人じゃあ心配だ」

「いいえ、お構いなく」

空を飛んで帰ればあつという間だし、女一人でも問題ない。

けれど、ミカエラは、私が精霊だと気がついていないので、余計なことは言えなかった。



「いいから、いいから。君、名前は？」

「な、名前!？」

彼の質問に私は狼狽<sup>うろた</sup>えた。

精霊には名前がない。精霊同士では、お互いの特徴を呼び合うので、特に不便には思わなかったが……これからの生活でそれは通用しないと気がついた。人間のように、きちんと名前を考えなければならぬ。

「ええと……」

精霊間での私の呼び名は、『水色の』だ。水色は「ミズイロ」や「スイイロ」、「ミナイロ」と読める。

私は、そこから自分の名前を考えた。

「そ、その……ミ、ミナイです！ ミナイ！」

「へえ、ミナイか。変わった響きの名前だね」

「そうですかね……？」

名前選びに失敗したのではないかと、私は少し焦った。しかし、ミカエラは嬉しそうに金色の目を細める。

「とても、可愛い名前だと思うよ」

自分のネーミングセンスが褒められて嬉しかった私は、そのままの流れでミカエラにホワイ村まで送られてしまった。

ホワイ村は人口五十人程度の小さな集落で、主な産業は岩塩や薬草の採取と農業。村で採れたものを近隣の村や町で物々交換することで生計を立てている。最近では、貨幣でのやりとりも増えて、副業で宿屋や薬師<sup>やくし</sup>をしている者も多いと村長が言っていた。

苔<sup>こけ</sup>に覆<sup>おお</sup>われた木製の平屋が多く、村の真ん中にはだだっ広い広場がある。

「それじゃあ、私の家は森の中なので……」

そう言っ、夕暮れ時の森へ向かう私をミカエラが引き止めた。

「送っていくよ。あとは宿に向かうだけだし」

「いいえ、そんな……」

私だって、あとは森に向かうだけなので一人で平気だ。

「ついでだからさ。ミナイが一人で住んでいる環境が気になるし」

「どうして、そこまで私を気にかけてくれるのですか？」

「どうして……女の子が森で一人暮らしなんて心配するのは普通だと思うけど……」

それに、君は僕の命の恩人だから、困っているのなら力になりたいんだ」

ミカエラは優しげに笑う。だが、昨日出会ったばかりの彼を頼る気はない。おにぎりあげたお礼なら、おつまみを買ってもらったことだけで充分だ。

村まで送ってもらったことを含めれば、こちらがお釣りを出さなければならぬ。

「あの、本当に、私は大丈夫ですから……」

しかし、ミカエラは強引に狩猟小屋までついてきた。

森の入り口から少し奥へ進んだ、アマモの森にしては日当たりのよい場所に私の狩猟小屋はある。

「えっと……かなり、ボロボロだね。正直、女の子の家と思えないというか、なんというか」

私の住処すまかを見たミカエラの顔色が悪い。

「そうですか？ 雨漏りもしないし、割と快適ですが」

「いや、今はしなくても、この状態ではすぐに屋根に穴が開くよ。壁もそう、ところどころひび割れている。窓や扉も立てつけが悪いね」

ミカエラは、外から見ただけなのに狩猟小屋を厳しく駄目出しした。

「構いません！ 穴が開いたら、隙間に何か詰めればいいし……屋根は、その、上に木の枝でも被せませす」

今までだって、森でそうしてきた。多少、他の精霊仲間の加護を借りたこともあるが

一人でも大丈夫だ。

「……あのさ」

「なんですか？」

「僕でよかつたら、屋根や壁を直すのを手伝うけど。冒険者だから、こう見えても器用なんだ」

まだ若いのに、ミカエラはいろいろなことができるようだ。

「いくらなんでも、そこまではお世話になれません」

「そんな遠慮は不要だよ。とにかく、明日の仕事が終わったらまた来るから家にいてね？」

強引に約束をした彼は、それだけ言うとおホイイ村へ帰っていった。途中で何度も心配そうにこちらを振り返りながら――

（精霊だから平気なのに、向こうは私のことを人間だと思っているからなあ。気持ちはありがたいけど、きちんと断らなきゃ）

ミカエラを見送った私は、狩猟小屋へ戻り寝台に腰かける。

村長にもらった寝具には綿のような植物が入っていて、とてもふかふかだ。古くて朽ちかけていても、狩猟小屋は私にとって快適な空間なのである。

翌朝目覚めた私は、ホワイイ村を目指した。途中、よく熟れた赤く小さい木の実を摘ん